



Title	平安朝詩文の「俗語」
Author(s)	後藤, 昭雄
Citation	語文. 1987, 48, p. 9-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68753
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平安朝詩文の「俗語」

後 藤 昭 雄

はじめに

平安朝の詩人たちは、中国における口語的語彙、いわゆる「俗語」も、その詩藝の中に取り込んでいた。それら平安朝詩に用いられた俗語について、これまで積極的に発言してこられたのは小島憲之氏で、その著書、論文における論及のほかに、直接の専論もあり、それらの中で多くの言葉が取り上げられてきた。また他の先学による考察、言及もある。⁽³⁾

しかし、これまでに取り上げられた言葉は、全体の一部にしか過ぎず、なお多くが残されている。これまでの論及は、時代的にいえば、十世紀の初頭、菅原道真の時代までに限られ、以後の詩については全く手つかずの状態に置かれているが、その道真の周辺までに限っても、なお取り上げるべき言葉は少なくない。そこで、一応平安初頭期から十世紀初めまでで区切って、その時代の詩に用いられた俗語のいくつかについて考えてみたい。ただし、『新撰万葉集』中の詩は、多くの俗語を含んではいないが、その作者も、制作年代も明確ではないので、いまは除外した。

なお、詩語と散文語との相違にも留意すべきこと、先学の注意されるところであるが、いまは詩に用いられた言葉であれば、同語の

散文の用例も援用した。

当

『菅家文章』巻一に「観王度園ある菖、猷皇人」という詩がある。

一死一生争道頻

一は死一は生 道を争ふこと頻りなり

手談厭却口談人

手談厭却す口談の人

殷勤不愧相嘲哂

殷勤に愧せず相嘲哂し

漫説当家有積薪

漫りに説く当家に積薪有り

結句に「世に大唐の王積薪の菖経一巻有り。故に云ふ」の自注がある。

結句について、日本古典文学大系本の頭注に、「私の家には先祖の王氏の菖の虎の巻があるのだからねとすずろに言いちらしたりする。『当家』は、日本語」という注が付けられている。句の解釈はおおむね妥当であるが、「当家」は日本語、というのは誤っている。これは道真の誤用すなわち和習ではない。

この語は漢語であり、『詩詞曲語辞匯釈』（巻六）『敦煌変文字義通釈』両著に採録する。そうしてその意味を『匯釈』は「猶云本家、或自家」、また『通釈』は「本家、自己家裏的、同姓」という。たとえば『通釈』では『搜神記』「田崑崙」条の

当家地内、有一水池、極深清妙

の例をあげ、

天女称崑崙為池主、可見水池是崑崙家裏所有的

と説明している。すなわち、「当家」は、「その家」あるいは「この家」、また「うちの」という意味である。

この詩の場合は「うちの」という意味になるが、それとともに「同姓」ということもある。これは『匯釈』の説明の方がわかりやすい。『匯釈』には唐詩から二例が引かれているが、その一つは白居易の詩である。次のようにいう。

白居易贈楚州郭使君詩『当家家事堆身上、何啻林宗与細侯』此亦猶云本家、以用郭姓典故也。

説明を補うと、白居易の「贈楚州郭使君」に、

当家家事堆身上

当家の美事^{うしか}身上に堆し

何啻林宗与細侯

何ぞ^た啻林宗と細侯とのみならんや

の一聯があり、ここに「当家」の語が用いられているが、それは郭氏に贈った詩に因んで、「同姓」の郭氏の典故を持ち出したことによる。林宗は後漢の郭泰、都洛陽に遊び、のち郷里に帰る時には、諸儒の見送る車が千乗もあつたが、林宗はひとり李膺とのみ舟に乗って河を渡った。人々はこれを見て神仙だと言ひ合つたという。細侯もやはり後漢の人、郭伋である。彼は循吏として名高く、并州の長官となって再度赴任した時には、老若が歓迎し、兒童數百人が竹馬に乗って迎えたという。詩は、この典故を踏まえて、郭家に関わる美事は何も昔のそうした人々には限らない、いま楚州使君となつて下る郭氏にもそうした美事は多いのだ、という意味である。もちろん後漢の郭氏と楚州使君の郭氏とに系譜上のつながりがある必要などはない。ユーモアである。

道眞の詩も同じ構造を持つ。碁を囲んでいるのが王度だから、同じ王姓の碁の神様王積薪を持ち出したのである。この場合も両者には直接のつながりはない。ないにもかかわらず、王積薪を持ち出したから、「漫^{また}りに説く」というのである。

『菅家文章』にはもう一つ「当家」の例がある。「絶句十首、賀諸進士及第」の第三首（巻二）に、

当^あ家好爵有^二遺塵^一、不^レ若槐林苦出身

の一聯がある。この詩には「橘風を賀す」の注記がある。学生の橘某の文章生及第を祝うものであるから、ここでの「当家」は、「この家」あるいは「その家」の意味である。

耶嬢

「耶」は「爺」とも表記されるが、父を、「嬢」は「娘」と表記されることもあるが、母をいう俗語である。「おやじ」「おふくろ」ということになろう。唐詩に次の例がある。

箇箇惜^二妻兒^一、爺娘不^二供養^一（寒山、我見世間人）

我住在^二村郷^一、無^レ爺亦無^レ嬢（寒山、我住在村郷）

耶嬢妻子走相迷、塵埃不^レ見威陽橋（杜甫、兵車行）⁽⁵⁾

村南村北哭声哀、兒別^二爺嬢^一夫別^二妻^一（白居易、新豐折臂翁）

平安朝詩では、「文華秀麗集」に用例がある。

独頼^二耶嬢偏愛重^一、何図見者^二以^レ為神^一（菅原清公、奉和春閨怨、

巻中）

そうして六朝以来の俗語であること、前掲の杜詩の例ほかをあげつつ、小島憲之氏の指摘がすである。⁽⁶⁾

『文華秀麗集』にはこの一例のみであるが、この語は空海の詩文に多くの用例がある。そのうちのいくつかをあげよう。

天子剃_レ頭猷_二弘駄_一、耶孃割_二愛奉_一能仁_二（山中有_二何案_一、『性靈集』卷一）

伏惟、先師德下、……、群品之耶孃、一人之帰焉。況復覆_レ我如_レ天、載_レ我如_レ地、撫_レ我若_レ孃、提_レ我若_レ父（為_二先師_一講_二釈梵網經_一表白、卷八）

伏惟、我皇帝陛下、……、三界之耶、万万之孃（和尚奉_二為_一祈_二皇帝_一、轉_二讀_二大般若經_一願文、卷八）

唐矣三尊、耶孃六趣（被_二修公_一家仁王講_二表白_一、卷八）

箇（个）

『詩人玉屑』卷六に、杜甫の詩における俗語の使用について、次のような論述が見える。

數_レ物以_レ个、謂_二食_一為_レ喫、其近_二鄙俗_一。独杜子美善用_レ之。云、峽口驚猿聞_一个、两个黃鸝鳴翠柳、却遶井桐添_二个_一、（後略）

助数詞としての「个（箇）」を、ものを食う意の「喫」とともに、杜甫がよく用いた俗語として指摘しているが、この、現代中国語もそうである助数詞の「箇」は平安朝詩でも用いられている。

まず、人を数えるのに用いた例。その用例をあげる前に、前引の杜詩はいずれも物を数えるのに用いた場合であるから、塩見邦彦氏の指摘を借用して、唐詩のその一、二をあげておこう。

已聞城上三更鼓、不_レ見心中一箇人（元稹、新政果）

不_レ知玉質双棲处、兩箇仙人是阿誰（貫休、寄_二鄭道士_一二首）

本朝では平安初期から用例がある。

千人万人拳不_レ応、唯君一箇帝心抽（贈_二野陸州歌_一、『性靈集』

卷一）

吾有三、箇瓊枝、不幸先_レ露（為_二酒人内公主_一遺言、『性靈集』卷

四）

「瓊枝」は玉の枝、ここでは酒人内親王の皇子をいう。

在_二辺亭_一賦得_二山花_一。戲寄_二兩箇_一領客使并滋三（王孝廉、『文華秀麗集』卷上）

これは詩題である。

吾告_二式部卿大藏卿安勅_一三箇親王也（為_二酒人内公主_一遺言、『性靈集』卷四）

下って延喜期に一例がある。

一院群居人七、疑從_二天上_一斗星投（三統理平、秋日陪_二左丞相城南水石亭_一祝_二藏外史大夫七旬之秋_一、『雜言奉和』）

次に、ものを数えるのに用いた例であるが、これは詩序の中ではあるが、早く『懷風藻』に用例があるので、挙げておこう。

待_二君千里之駕_一、于_レ今三年、懸_二我一箇之榻_一、於是九秋（藤原字合、在_二常陸_一贈_二倭判官留在_二京_一）

以下、平安朝詩の例。

一箇無明諸行業、不_レ中不_レ外惑_二凡情_一（詠十喻詩、『統性靈集補闕鈔』卷十）

比来朔雁度千番、一箇封書末_二曾看_一（巨勢識人、和_二伴姫秋夜聞情_一、『文華秀麗集』卷中）

試賦_二臨年專_一、仙齡幾箇迎（賀陽豊年、詠桜、『経国集』卷十二）

歳中翫_二菊過_一秋深、百箇花前久陸沈（待_二中局賦_一秋陽曝_二菊花_一、『田氏家集』卷中）

『菅家文草』には五例があるが、いまは一つにとどめておこう。点検窓頭数箇梅、花時不_レ記幾年開（書斎雨日独对梅花、卷一）

都廬

豊田穰「唐詩俗語攷」(『唐詩研究』)に採録されていて、その

「葛原詩話」(巻三)では「都来」と同じく「スベテトイフコト」となしてゐるのが、当つてゐると思ふ。「都盧」の盧は「都来」の来と同じく単に語尾に添えられただけの助辞であつて、一音節でいへば「都」であり、二音節にのばしていへば「都盧」になる。

という説明が、よくこの語の意義を説いている。『遊仙窟』に二つの用例がある。

遮_レ三不_レ得_レ一、員_レ阿都盧失
触_レ処尋_レ芳樹_一、都_レ慮_レ少_レ物華_一
白居易の詩にも見える。

骨肉都盧無_三十_一ロ一糧儲依約有_三三年_一

『葛原詩話』には、「旧訳ノ般若経ノ内、処々ニ都盧ト云字アリ」とも述べている。私の調査はそこまで及んでいないが、漢訳仏典に口語が多く用いられていることは周知のことである。

我が国では「新撰字鏡」巻十二(二六〇)に「都盧_同」とあり、「同上」は直前の「総豈」に付された訓み「志加之奈加良」を承けるが、この「シカシナガラ」は、逆接の接続詞のそれではなく、「すべて」の意である。

詩文では、早くは菅原道真の文章に用例がある。

一つに「鴻臚贈答詩序」(『菅家文章』巻七)に、

二大夫、兩典客、与_三客徒_一相贈答同和之作、首尾五十八首。更加_三江郎中一篇_一、都_レ慮_レ五十九首。

また道真が父是善の命に従つて作つた『文徳実録』の序文に、起_三自_一嘉祥三年三月己亥、訖_三于天安二年八月乙卯_一、都_レ慮_レ九年。

勅成三十卷。

とある。後者について言えば、この部分に当たる所が、他の正史では、

起_三于天長十年二月乙酉_一、訖_三于嘉祥三年三月己亥_一、惣_三十八年_一。擲_三春秋之正体_一、聯_三甲子_一以詮次。考以_三始終_一、分_三其首尾_一、都為_三廿卷_一。(続日本後紀序)

起_三於天安二年八月乙卯_一、訖_三于仁和三年八月丁卯_一、首尾三十年、都為_三五十卷_一。(三代実録序)

と、「惣」「都」と一字で書かれていることは、「盧」は接尾辞であつて、一音節でいへば「都」、二音節にのばして「都盧」となるといふ、前引の「唐詩俗語攷」の説明の正しさを証明するものである。

ついでにいへば、勅撰の正史の序文という、撰者の上首である右大臣藤原基経が陽成天皇に奏上するという体裁をもつ、最も折目正しいものであるはずの文章の中に、道真はこのような口語的語彙を取り込んでゐるわけである。

他に、同時代の三統理平に、

幾許群臣呈_三露胆_一、都_レ慮_レ万物照_三秋毫_一(『齊色明』遠空、『類聚句題抄』)

があり、時代が下つて、大江匡衡の詩序に、

左親衛藤中郎將、……及朝士大夫、夕拜侍中、都_レ慮_レ十有余人、会_三合于藤原相別業_一矣。(夏日陪_三藤原相城北山莊_一同賦淡交唯對_三水詩序_一、『江吏部集』上)

大江匡房に、

五畿及七道、毎_レ国祭祀祇、都_レ慮_レ四海内、争不_レ仰_三指搢_一(『參安樂寺詩』、『本朝統文粹』巻一)

などの例がある。⁽⁸⁾

一種

『詩詞曲語辭匯釈』に、

猶云一樣、或同是也。

とある。「同じ」「同様の」の意で用いられる。李白、杜甫以下多くの例が引揚されているが、その一、二をあげると、

一、種_レ為_二三人妻_一、独自多_二悲恫_一（李白、江夏行）

一、種_レ愛_二魚心各異_一、我來施_二食爾垂_一鉤（白居易、觀遊魚詩）

我が国では、平安初頭詩にすで見える。『経国集』に、

忽見三春木、芳花_一種_一催（高村田使、奉和殿前梅花、卷十一）

九區千万里、一種色_一離離（金雄津、詠雪、卷十三）

『性靈集』に、

夏月涼風、冬天淵風、一種之氣、嗔喜不同（徒懷玉、卷二）

一、種_レ阿字多旋転、無刃法義因_レ妓宣（詠十喻詩、卷十）

『雜言奉和』に、

只為_二芬芳_一近仙看、万樹榮暉、一種同（坂田永河、奉和_二聖製河上落花詞_一）

また、菅原道真の周囲においても、『菅家文章』に六例、嶋田忠臣の『田氏家集』に三例、『雜言奉和』に二例があるが、いまは道

真と忠臣の詩一例ずつをあげておこう。

山郵水駅思紛紛、一種風光兩處分（喜田少府罷_二官歸京_一、卷二）

数十名駒、一種良、恩頒近侍雁成行（和_二高侍中鎮夷府貢_一良馬

数十疋、有_レ勅頒賜、偶題_二長句_一、卷上）

以上の諸例、いずれも「同じ」あるいは「同じように」と解すべきものである。

除非

『文語解』に、

俚語ノコレハカクベツト云意ナリ、コノ義ヨリシテ、タダト訳

スベキ所オオシ

と述べている。『詩詞曲語辭匯釈』（卷四）にも、

仮設一例外以見其只有此也。

と説明されている。「ただ……だけ」の意である。そこに挙げられているのは宋以後のものであるが、塩見氏は早く唐詩の例を指摘されている。白居易詩にも用例がある。⁽⁹⁾

除非奉_二朝謁_一、此外無_二別牽_一（朝婦書寄_二三八_一）

除非一杯酒、何物更_二関_一身（感春）

我が国の詩では、わずかに『田氏家集』に次の例がある。

除非鮮服隨_二鱸膾_一 除非鮮服に鱸膾を随ふるのみ

自外紛紛俗納_二牽_一 自外は紛紛として俗納に牽かる

（奉_二和_一大相立秋日感_二涼風_一至_二詩_一、卷中）

何物

この語については、吉川幸次郎氏に説がある。すなわち、現代中国語では、「なに」と尋ねる時に、「甚麼」ということが普通に用いられるが、その前身に当たるのが、「何物」である。「何物」といういい方は、一見、「なにもの」を意味するように見えるが、そうではない。「なにもの」ではなくして、ただの「なに」なのである。……、「物」は軽くそわるだけであって、「物」の字がほかの場合にもつような重い意味で使われているのではない。⁽¹⁰⁾この語は、六朝時代から用いられるが、唐詩においても、初唐以来多用される俗語の一つである。⁽¹¹⁾

我が国では、文章であるが、早く空海に用例がある。

何物寂寥相待見、香爐煙与水瓶花（送三禪師還山、田氏家集）卷上

一年何物始終來、請見寒中有早梅（晚冬過文郎中、翫庭前早梅、『萱家文章』卷二）

子孫何物遺、衣食何餽充（舟中行事、『菅家文草』卷三）

以上いずれも、吉川氏の指摘のごとく、「なに」と訓まなければならぬ。

底

「なに」である。本朝の詩では、以下にあげるように、「縁底」（な
ぜ、どうして）の形で用いられるのがほとんどであるが、その中国
詩の例は『詩詞曲語辭匯釈』にあげる、王維の「愚公谷」の

縁底名ニ愚谷一、都由ニ愚所ニ成
がある。

我が国では、嶋田忠臣の詩に用いられたのが初例である。「同萱
侍郎醉中脱衣贈裴大使」（『田氏家集』巻中）に、

此物呈_レ君緣底事、他時引_レ領暗愁生

と見える。以後、平安中期以降の詩人に愛用される。

詩情緣底大蒸仍、蓮府秋池浮_レ月澄（左相府東三条第同賦_三池水

浮二明月、『江吏部集』卷上）

なお、大江匡衡は、別の場でこの句と酷似した句を作っているが、

そこでは、

と、「縁底」に代えて「何事」の語を措いている。

多年稽古属_二儒業_一、緣底此時不_二泰平_一（一条天皇、書中有_二往事_一）

『本朝麗藻』卷下）

閣東陪宴翫清影、緣底遠尋庾亮樓（藤原茂明、賦月、『本朝無題詩』卷二）

本自此身無_二定体_一 浮雲緣底慕_二浮名_一 (藤原通憲、閑中独吟、

『本朝無題詩』卷五

緣底別^二憂苦^一 奚因取^二檣模^一（藤原敦光、初冬述懷百韻、『本朝
統文粹』卷一）

緣底愁三病蚕、誰敢食三蹲鴟二（大江匡房、參安樂寺詩、『本朝統
文粹』卷一）

秋風緣底先^二秋光^一 扇裡報來斷^二感腸^一 (藤原憲房、扇裡有^二秋風^一)

『天喜四年殿上詩合』

事須

序』（『菅家文草』巻七）には、もう一つ俗語が用いられている。

余与_二郎中_一相議、裴大使七步之才也。他席贈遺、疑在_二宿構_一。

事須_下別預_ニ宴席_一、各竭_ニ鄙懷_一、面對之外、不_中更作_也詩也。

圈点を付した「事須」について、日本古典文学大系本には次の注が付されている。

入矢氏云、事須二字、見于韓愈・白居易文并敦煌變文。即与是須同。事是並接頭語。

中国学の入矢義高氏の示教として、この「事」は接頭語で、下の「須」を強調するためのものであることが注意されている。従って、訓読するときも、二字一語として「事須」で「すべからず」と読むことになる。入矢氏は韓愈・白居易の文章、敦煌変文にその用例のあることを指摘しておられるが、塩見氏の「唐詩俗語新考」(13)には、唐詩及び「遊仙窟」の例もあげられている。

本朝の詩文では、道真に先立って、塩見氏の指摘があるが、空海の『文鏡秘府論』に見える。ここには、その別の例をあげよう。

若五字並輕、則脱略無所止泊^二外^一。若五字並重、則文章暗濁。事須輕重相間、仍須以声律^二之^一。(南卷、論文意)

凡一句五言之中而論蜂腰、則初腰、事須急避^二之^一。(西卷、文二十八種病)

詩では『田氏家集』に二例がある。

百葉就中多効力、事須嗜^二菊得^二如椿^一 (失題、卷上)

軟脚当^二帰雲洞裏^一、事須^二万歳用^二仙羞^一 (九日侍宴冷然院、各賦^二山人採桑^一、卷上)

―他

動詞に連接して口語的語彙を作る一連の接尾語がある。「忘却」の「却」、「記取」の「取」などである。これらのうち、殺、得、取、却、来についてはすでに小島憲之氏に論及がある。ほかに「着著」があるが、これは見やすい語であるから、いまは取り上げない。ここに取り上げるのは「他」である。

接尾語としての「他」については諸書に言及がほとんど見られない。管見で見いだしたのは、志村良治『中国中世語法史研究』の、「他」にはなお動詞にそい無関心の気持を伝える独特の機能があ

(15)
る」という言及であった。そこで例として挙げられているのは、「遊仙窟」の

今朝并復随他弄

王維の「与盧員外象過崔處士興宗林亭」の

科頭箕踞長松下、白眼看他世上人

である。

なお、『詩語解』に「他」に「彼」の意があるとして、その例にこの王維の詩を用いて、「白眼にして他の世上の人を見る」と読んでゐる。「他」に「彼」の意味があるというのはその通りであるが、王維の詩をそう解するのは誤りであろう。「無関心の気持ちを伝える」というのは、果たしてそうか、疑問にも思うが、やはり動詞に付く接尾語と見るべきである。

この接尾語として用いられた「他」が、嶋田忠臣の詩に二例見いだされる。「看^二侍中局壁頭挿^二紙鸞^一呈^二諸同志^一」(『田氏家集』卷上)、タコという珍しい題材を詠んだ詩に、

了得行藏能在^二我^一、憐他飛伏必依^二人^一

がある。そうしてこの場合、「憐他」が、やはり口語的語彙を作る「得」を添えた「了得」と対語をなしていることが、「他」を接尾辞と考えるべき、見やすい証拠である。

もう一例は、「暮春宴^二菅尚書亭^一同賦^二掃^二庭花自落^一」(卷下)の

清昼憐看遲日暮、恨他^二乘^二醉踏^二花還^一

である。

なお、『扶桑集』卷七所収、惟良春道の「野副使卓世之工文者也」云々という長い詩題の詩に、

看他^二蹈^二黷苦相交^一、毀^二管隨^二心變^二羽毛^一

の一聯がある。ここに見える「他」について、小島憲之氏は、現代語の「那」「那箇」に当たるとして、上句を「他の語彙を見るに相交ることに苦しむ」と読んでおられるが、上述のように、平安朝詩に接尾語としての「他」が存在することを考慮すると、この「看他」もそう理解することもできるのである。ただし、いまは確かにそうだと主張する自信がないが、その可能性を指摘しておきたい。

このような接尾語としての「他」ということから、「任他」「從他」に思い至る。この二語は従来ともに「サモアラバアレ」と訓みならわされてきている。たとえば『文語解』巻四では、他の「從教」「任從」「遮莫」など十三語とともにあげて、

此皆俗語、詩語ニ用ユ、ソノ義ミナ同ジ、但語ノカマハナリと説明する。「任他」「從他」は固定化して熟語となっているが、語構成を考えてみると、「任」「從」はともに「ゆるす」「まかせる」「自由にさせる」という意で、それに強意を表わす、あるいはこの場合にこそ、志村氏のいわれる「動詞にそい無関心の気持を伝える独特の機能」が妥当すると思われるが、その「他」が付接したものである。すなわち、「任他」「從他」もやはり接尾語「他」を持つ俗語ということになる。

『詩詞曲語辞匯釈』（巻一）には「從他」の例として、李白の「白頭吟」の、

莫_レ掩_二龍鬚席_一 從_二他_一生_二網糸_一

があげられている。他に、塩見氏の指摘を借用すると、次の例がある。

無_レ情亦任_二他_一春去、不_レ辭爭銷得_二昼長_一（白居易、早夏曉興贈_二夢得_一）

任_二他_一名利客、車馬間_二康莊_一（殷堯藩、寄_二許渾秀才_一）
從_二他_一後人見、境趣誰_レ為_二幽_一（李翺、戲贈詩）
本朝では、まず「任他」は『菅家文草』に二例がある。

森森任_二他_一臨_二北海_一、幡幡定_二是_二養_二東_一（和_二大使交_二字_一之作、卷五）
幸被_二君臣_一交_二畝_一種、任_二他_一意氣滿_二園_一（九月尽日題_二殘菊_一、卷六）

「從他」は『田氏家集』巻上、「病後閑座偶吟所懷」に、
從_二他_一軟脚難_二行_一步、只_二幸_二凝_二神_一不_二坐_一馳

やや時代が下って、『本朝麗藻』巻下的一条天皇、「瑤琴治世音」に、

從_二他_一樂府清弦上、至_二德_二深_二仁_一幾聖朝

と見える。以下の挙例は省略するが、「任他」は、同じ意味の語「遮莫」とともに、平安後期には多用されるに至る。

（注）

（1）『国風暗黒時代の文学』中（中）、『古今集以前、「白詩の影」（谷山茂教授退職記念国文学論集）など。

（2）「語の性格—外来の「俗語」を中心として—」（『上代の文学と言語』）。

（3）松浦友久「不分境番屑—来客旅客巾—唐代俗語と平安朝の詩人—」（『漢文学研究』11号）。川口久雄氏による日本古典文学大系「菅家文草菅家後集」の頭注、補注における指摘。金原理「『軟脚』考」（『平安朝漢詩文の研究』）なおこの語については「敦煌変文字義通釈」に論及がある。

（4）小島憲之「漢語享受の問題に關して—「万葉語」の場合—」（『高野山大学国語国文』3号）。

（5）杜甫のこの句の口語性を論じたものに、松浦友久「耶娘妻子走相送—唐詩の白話的表現と賦戰詩の発想—」（『詩語の諸相』）がある。

（6）日本古典文学大系本補注。

（7）『唐詩俗語新考（四）』（『文化紀要』（弘前大学教養部）19号）。

(8) 我が国の詩文では「都慮」と表記される場合が多い。「文徳実録序」も「慮」に作る何本かがあり、「参安楽寺詩」も「慮」とする本がある(ともに国史大系本頭注による)。「応は『遊仙窟』の例について豊田穰氏が処理されたように、「慮の訛であろう」と考えられるが(『唐詩俗語攷』『唐詩研究』)、接尾語でもあり、なお考えるべき問題のように思われる。

(9) 塩見邦彦『唐詩俗語新考』(『立命館文学』430 431 432 合併号)。

(10) 『六朝助字小記』(『中国散文論』)。

(11) 塩見邦彦『唐詩俗語新考』(『文化紀要』(弘前大学教養部) 17号)

(12) 傍記は祐徳神社中川文庫本、山口県立図書館本の本文。

(13) 『文化紀要』(弘前大学教養部) 18号。

(14) 注1に同じ。

(15) 同書一〇〇ページ。

(16) 『国風暗黒時代の文学』中(上)六六九ページ。

(17) 注9に同じ。